

## 特別奨励賞

### 「19才になれた理由」

僕は生まれてから16歳になるまで虐待を受けて育ちました。

毎日のように生まなきゃよかったと言われました。暴力を振るわれたり、ご飯が食べられない日も多く何度も倒れました。倒れて、頭から血が出た時、お母さんは笑っていました。僕にとってそれは当たり前でした。

僕は家族が大好きでした。でも、中学生になると自分の家は変だと知りました。初めて学校の先生に家のことを話しました。いつも話を聞いてくれる先生もいましたが、一番大きな暴力の話をした時、担任の先生に言われたのは、「お母さんはあなたを愛しているんだよ、そんなことしてないでしょう。」という言葉でした。僕は家族を大切にできない自分が悪いんだと思いました。

でも高校生になってからその考えが変わる大人に出会いました。その人は僕のことを一度も否定しませんでした。「大人は応援する、少なくとも僕は応援する。」と言ってくれました。また、ある人は、「私はあなたを信じるよ。」と言ってくれました。僕が家を出たいと話した時、一緒に児童相談所に行ったり、弁護士さんに電話してくれました。弁護士さんは夜中まで何時間も僕の話聞いてくれました。

高校2年生になった4月、僕は母の家を出て子どもシェルターに入りました。生まれて初めての自分のための決断でした。シェルターで出会ったのは同じように家を出る決断をした友達でした。暴力を受けていたり、精神的に追い込まれていたり、みんな様々な事情を抱えていました。いつも思いやり、励ましてくれました。僕は勇気をもらいました。ある職員さんが「朝は顔を洗うんだよ。」と教えてくれました。その時はなんでそんなこと朝にやるんだろうと思いました。朝、顔を洗うたびに僕は親のものではなく自分の人生を始められたのだと実感しました。

他にもたくさんの人に支えられて生きてきました。うまく話せなくても、時間がかかっても、話を聞いてくれて、考えてくれる人たちです。血がつながっていないけれど、僕はたくさん友達や大人たちから生きることを学びました。子どもの権利を社会には守って欲しいと思います。僕は親から暴力を受けて保護されるまで時間がかかりました。僕は自分のことを信じてくれる大人に出会えたから、僕は僕でいいんだと思いました。明日を生きていけるのかもしれないと思いました。僕もいつかは誰かを信じることができ、生きていける勇気を渡せるような大人になりたいです。